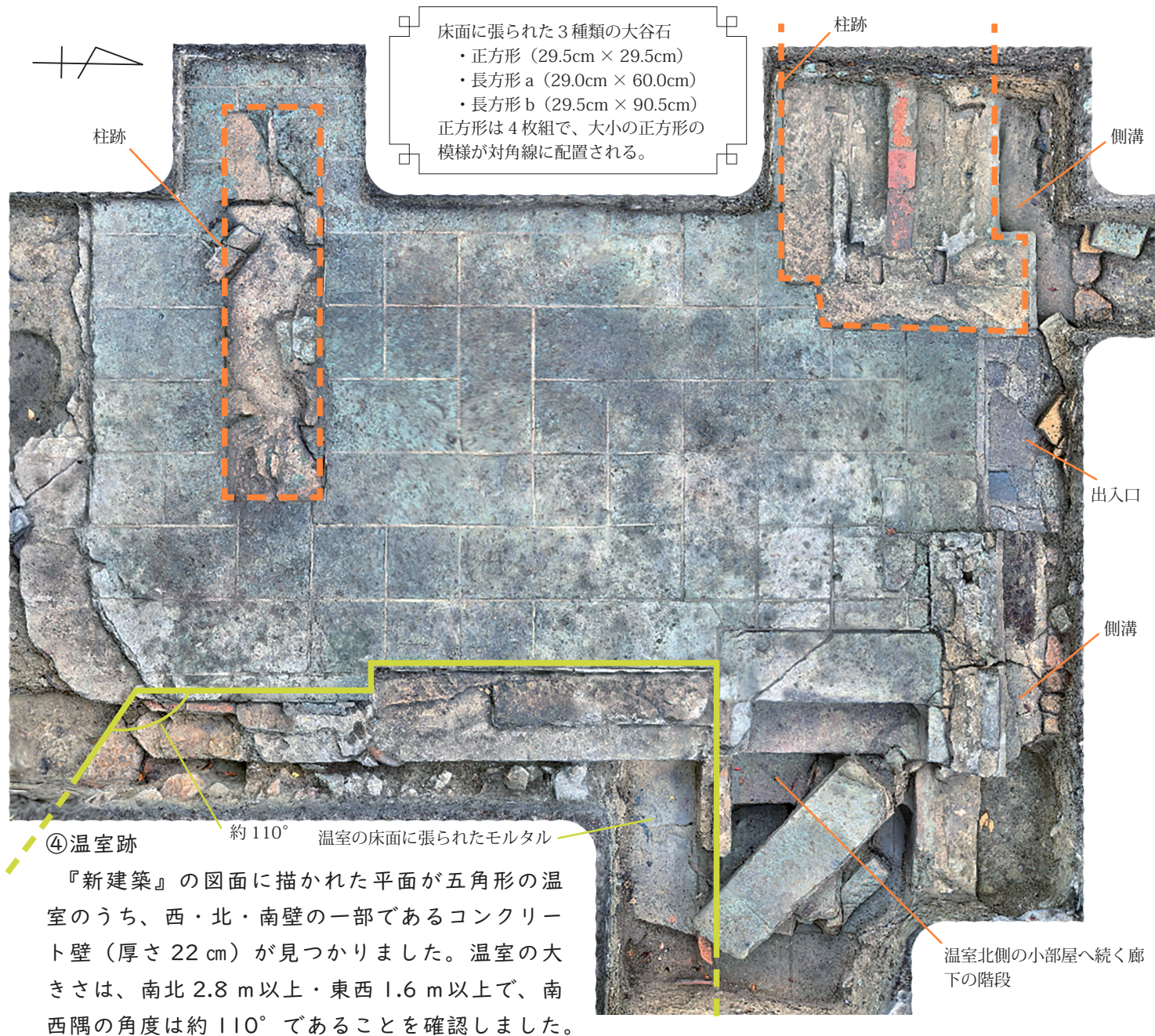


③ 渡り廊下跡

温室と倉庫脇に設けられた階段を結ぶ屋根付きの渡り廊下で、床面には大谷石が張られています。大谷石は、正方形と2種類の長方形の計3種類の板石を規則的に組み合わせた意匠となっています。さらに、屋根を支えていた柱跡や、屋根北側の下に設けられた側溝、温室北側の小部屋へ続く階段などを確認しました。

(図11) 発掘された③渡り廊下跡・④温室跡(北東から)



4. まとめ：フランク・ロイド・ライトの建築理念～有機的建築～

今回の発掘調査では、これまで実態がほとんどわかっていなかったヨドコウ迎賓館の付属建物(温室跡・渡り廊下跡等)と、滝跡・池跡など、庭園の一部も確認することができました。これらの発掘調査成果から、フランク・ロイド・ライトの建築理念である自然と建築との調和(=有機的建築)が、敷地全体を一体として捉えられていたと考えることができます。これまで主屋のみが注目されていたヨドコウ迎賓館ですが、今後は敷地全体からその価値を再評価する必要があるでしょう。

調査監修：足立裕司(神戸大学名誉教授) 調査監理：芦屋市教育委員会
資料作成 芦屋市教育委員会 教育部 社会教育室 生涯学習課 (〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7-6 TEL:0797-38-2115)



(図1) 現存する付属建物(倉庫・階段)と発掘された付属建物(渡り廊下跡・温室跡) ▲前半 ▲後半

ヨドコウ迎賓館

(国指定重要文化財旧山邑家住宅)

発掘調査 現地見学会資料

2023年10月31日(火)
10時～15時30分



ヨドコウ迎賓館(主屋)の詳細については、芦屋市ホームページ掲載の、『芦屋の近代建築』をご覧ください。

1. ヨドコウ迎賓館(旧山邑家住宅)について

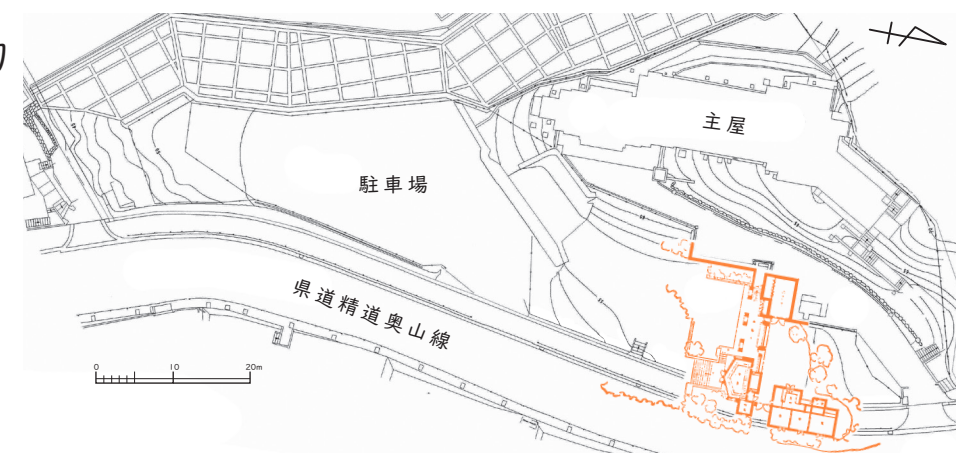
ヨドコウ迎賓館(旧山邑家住宅)は、「櫻正宗」の銘柄で知られる灘五郷の山邑酒造株式会社(現在の櫻正宗株式会社)8代目当主・山邑太左衛門の別邸として、1924(大正13)年に建てられ、現在は、株式会社淀川製鋼所所有の建物として一般公開されています。近代建築の巨匠であるフランク・ロイド・ライトの設計で、弟子の遠藤新と南信の実設計・施工監修によって竣工しました。

2. 図面に描かれた付属建物

1925(大正14)年刊行の雑誌『新建築』に南信が執筆した「山邑邸解説」に掲載された図面には、主屋の東側の一段下がった場所に、付属建物が描かれています。これらは、温室や使用人の住居、倉庫と、倉庫脇に設けられた主屋へ続く階段、階段と温室を結ぶ屋根付きの渡り廊下です。また、文章中には、付属建物からさらに「一段下がった平地に池を置く」と記されています。

付属建物のうち、現存するのは倉庫と階段のみです(図1)。また、1963(昭和38)年の県道精道奥山線の拡幅によって敷地が大きく削られたことや、戦後に住宅が建てられていたこともあり、温室や使用人の住居、渡り廊下などは、『新建築』の図面でしかわからない存在となっていました。

今回の発掘調査では、これら付属建物の遺構が地中に良好な状態で保存されていることが明らかになりました。



(図2) ヨドコウ迎賓館現況敷地図と、南信1925「山邑邸解説」『新建築』第1巻第2号掲載の図面(オレンジ色)



(図3) ヨドコウ迎賓館の竣工当時の模型に復元された付属建物
(模型制作：工学院大学建築学科南迫研究室 制作協力：井上祐一)

3. 発掘された遺構

① 滝跡

花崗岩の自然石を組んだもので、高さが約1.4m、幅が約0.9mです。底にモルタルを張った水路が北東へのびています。

この滝は、『新建築』の図面には描かれていませんが、滝の水が池へと流れこむ庭園があったと推測しています。

庭石として移設された、徳川大坂城東六甲採石場に伴う矢穴石（詳細は右記二次元コード）。



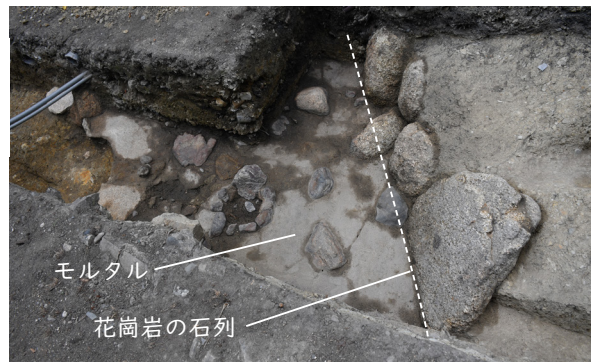
(図7) モルタルを張った水路



(図8) 発掘された滝跡(①) (北東から)

② 池跡

池の北縁と考えられる花崗岩の自然石が並べられた石列を確認しました。池の底はモルタルを張り、花崗岩や赤色のチャート等の石が埋め込まれています。



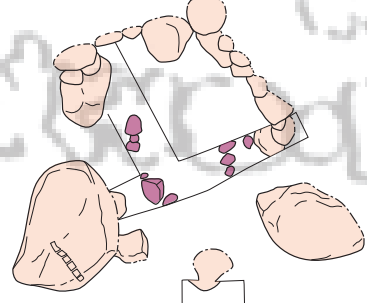
(図9) 発掘された池跡(②) (東から)



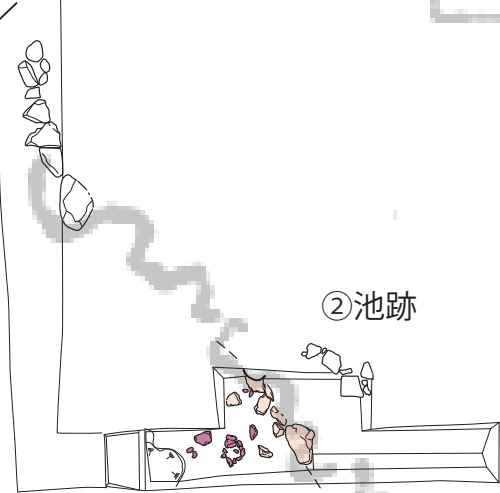
⑤ 出土した大谷石製飾り石
付属建物に使われていたと考えられ、主屋の飾り石と同じ装飾が施されています。

(図10) 出土した大谷石製飾り石(⑤)と同じものが使用されている主屋の車寄せ

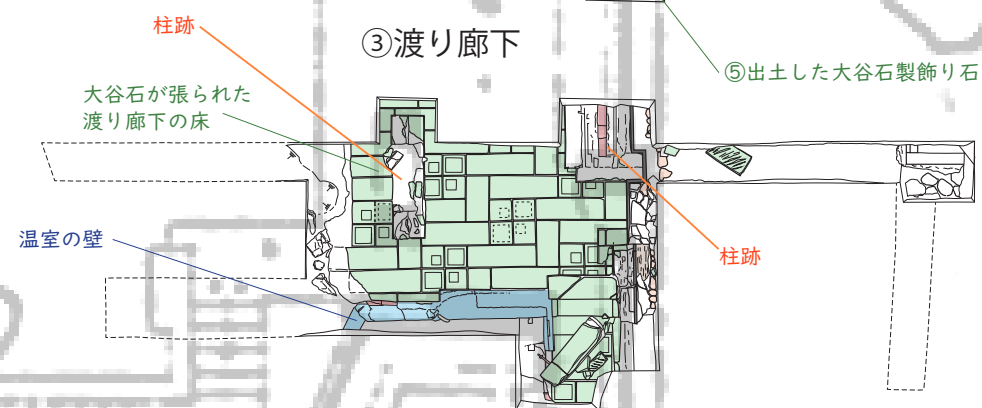
① 滝跡



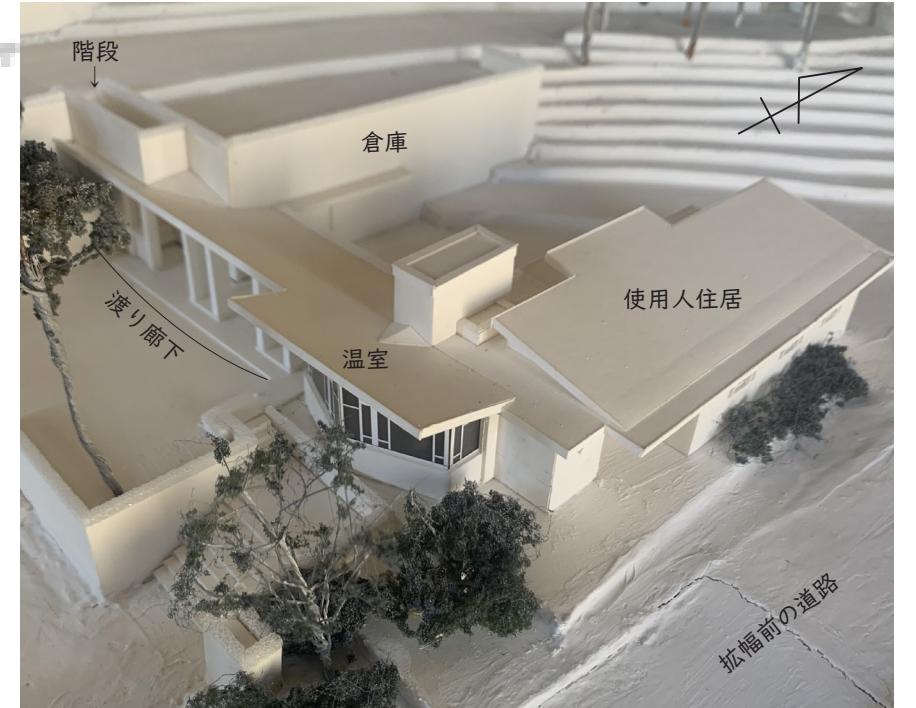
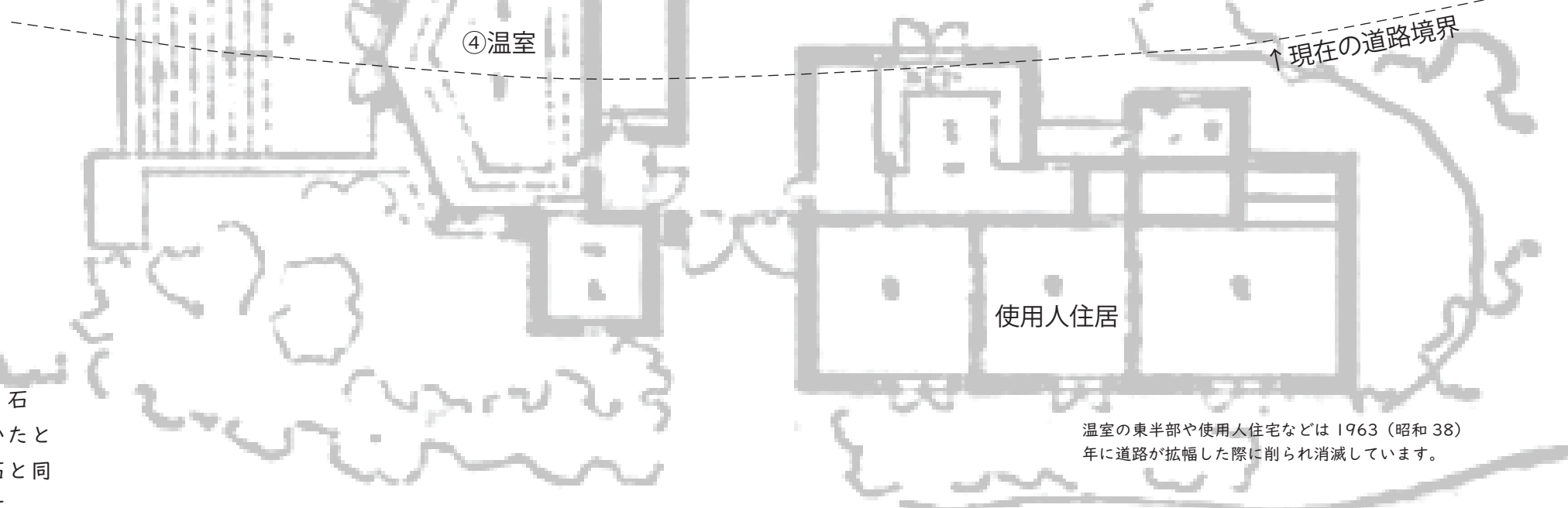
② 池跡



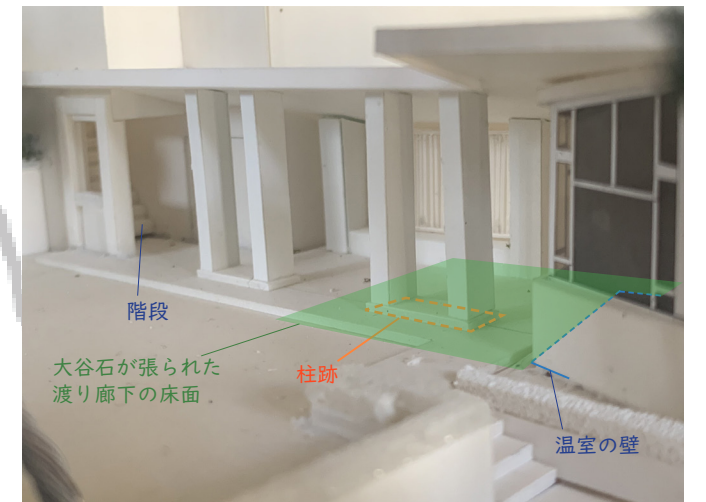
③ 渡り廊下



④ 温室



(図5) 模型で復元された付属建物(南東から)



(図6) 模型でみる今回の発掘調査箇所(南東から)
※③渡り廊下、④温室跡の詳細は裏面をご覧ください。

(図4) 今回、発掘調査された遺構と図面(南信1925「山邑邸解説」『新建築』第1巻第2号掲載)の合成図

温室の東半部や使用人住宅などは1963(昭和38)年に道路が拡幅した際に削られ消滅しています。

↑現在の道路境界